

蘇芳集



松 風 高橋 さえ子

大 歳 青山 丈

波郷忌の松風を聞く深大寺
人に見られて凍て鶴の歩き出す
鍋鶴の日暮淋しと檻出づる
湧水の明かりが肩に日脚伸ぶ
夜が来て寒気に細るたなごころ
シチリアの原塩甘しクリスマス
七五三五葉の松のあをの照り

葉の全部落ちて銀杏の木となりぬ
何人か冬至の人と駅に居る
焼藪を両手で割つて二つかな
探梅のおにぎりを出る梅の種
数へ日の幾日目かの日暮かな
一つづつ減らぬ日もある寒玉子
大歳の蕎麦屋の隅の席が空く

木守柿

八木下 末黒

空打つ声

小川 美知子

月曜を休む理髪師びはの花
日のあたるベンチに移る日向ぼこ
灯台にあともうすこし帰り花
灯台の灯の回りだすクリスマス
落葉掻き小山いくつもできあがる
まだ落ちるなど青空の木守柿
終業のメールを送り年つまる

眼中の人

吉田 幸敏

冬の水

木内 憲子

誰も彼も話すは小声枯蟪蛄
西へ行く枯蟪蛄と目が合ひぬ
枯蟪蛄この眼光に覚えあり
枯蟪蛄その眼中の人となる
次の世もまた逢ひに来よ枯蟪蛄
鯰漁夫の総立ち長沼三津夫逝く(悼長沼三津夫)
鯰起し立山威儀を崩さざる

火を焚くやうに十二月来たりけり
落葉にもまだある彩を踏みてゆく
半券が枯葉の中に落ちてゐる
水こぼすやうに山茶花散る日なり
道師走赤いコーンが少し邪魔
歳晩の頼まれもせぬものを買ふ
寒禽に空打つ声のありにけり
移る日の大木ほのと十二月
青き橋かけて一切枯るるもの
音もなく電車近づく冬早
飽くこともなし寒星に息合はせ
冬の水思ひとどむるすべ知らず(悼長沼三津夫)
こんな夜は少し会ひたき雪女郎
年ゆくと誰にともなく眩ける

蔓 草

小島 みつ如

小春日を樹々へ蔓草引きおとし
米届く小春自立の子らへ分け
十二月茶房手伝ふ娘の熱意
年末は生きる証の用事多々
書棚みな昭和の匂ひ冬日射し
数へ日やグウチヨキパアの運動を
車中より終ひ天神さま拜す

ポインセチア

清水 裕子

ポインセチア鏡の中の長話
高だかと男の子抱き上ぐ息白く
竹林の日射し嬬やか神迎ふ
吹き降りに地を染め至る落葉かな
落葉踏みゆけばシャンソン歌ひたし
不祝儀の身近に起こり十二月
切株の朽ちて土色掃納

冬 曙

下平 直子

青菜摘む冬曙の星の下
掃き寄せて落葉の嵩に住み古りぬ
膝掛や少しうとうとしたやうな
湯ざめしてかすかな音に聴くをり
冬至風呂手足いささか細りしや
煤掃きし卓に一花を誕生日
おほかたは恙無き日々古曆

冬

富田 正吉

口を出るこゑのすべてが冬といふ
はせを忌のこを曲れば旅となる
雪螢大事なひとを失ひ童長沼津夫氏
冬らしくなつて自分に戻るなり
つはぶきの黄はどう見ても月の色
老人も手をつなぎゆく十二月
さざなみがさざなみを追ふ寒さかな